

◆巻頭言◆

アウトカム経済の時代 その3

カウンターカルチャーの取り込み、人口減少化の産業革命

日本ナレッジ・マネジメント学会専務理事 山崎 秀夫

紀元前の古代ローマ帝国時代、全ての道はローマに通じると言われた。道路はローマ帝国の国を支える主要なインフラであった訳だ。アウトカム経済の時代に必須となる基本的インフラには、道路や鉄道、空港、電力ネットワークなどにインターネットが加わる。そしてアウトカム経済の時代には、ありとあらゆるモノがインターネットに繋がる IoT の時代が来ると予測されている。そこで今回はアウトカム経済を支える IoT の底流にあるカウンターカルチャー文化について述べてみたい。これは日本の時計職人文化や工場の職人文化を背景にして登場した日本的モノ作りの文化、従って暗黙知の文化とは全く異なる。アウトカム経済を支えるシリコンバレーの世界のコンテクストを理解しよう。

■ インターネットとパソコン台頭の背景にあるカウンターカルチャー文化

意外と知られていない歴史的事実にインターネットの元型となった「アルパネット」とそれが東西冷戦の終焉を契機にインターネットへと大衆化する 90年代に活用された「パソコン」の台頭の背景には、カリフォルニア州のカウンターカルチャー文化が存在すると言う点である。50年代から60年代のスタンフォード大、関連研究所 SRI、カリフォルニア州立大などは、ドラッグ、反戦運動、ヒッピー、ハッカー、様々な宗教運動やコミュニケーション運動などの全米のカウンターカルチャー文化の拠点であった。またヒューマン・ポテンシャル・ムーブメントなどに代表される人間性心理学（アブラハム・マズローが有名）などの強い影響を受けていた点も特徴である。そこには産業社会の組織が求める「分業による自己表現の制約」「大量生産によるライフスタイルの画一化、ピラミッド型組織」などへの激しい反発がある。

この反体制運動がアルパネットの誕生や後にパソコンを生み出した SRI などのオーグメント・リサーチグループなどに大きな影響を与えている。そしてこの影響は現代のアウトカム経済にも幅広く残っている。

1970年代に多数のホビイストが集まり、数多くのパソコンを生み出したホームブロー・

コンピュータークラブが立ち上がった。このクラブを立ち上げたフレッド・ムーア氏は有名な徴兵拒否運動の反戦活動家である。彼らの多くは人の潜在的な可能性を發揮し、創造性を強化する手段として「ドラッグとパソコンを同列」に並べて考えていた。これはニュートン力学を完成させたニュートンが「同時に錬金術」を研究していた史実を思い起こさせるような驚きのトピックである。結局、パソコン産業は、当時研究のトップを走っていたゼロックスではなく、同社のパロアルト研究所の技術を参考にしてカウンターカルチャーを共有するホビイスト（日曜大工）が立ち上げたと言う点は非常に興味深い。ホームブロー・コンピュータークラブに集ったホビイストにより約 23 種類のパソコンが作られたと言われているが、その一つがステイブ・ジョブズ氏のアップルコンピューターである。ジョブズ氏自身も宗教に凝り、コミュニンで暮らし、女性を妊娠させるようなヒッピーであり、また有名なハッカーだった。

スタンフォード大からゼロックスに移籍し、パソコンの概念を發明し、ジョブズ氏などを支援したアラン・ケイ氏は「パソコンはコンピューターのパワーを大企業から人民の手に取り戻す手段だ」と述べている。そしてジョブズ氏率いる 80 年代のアップルコンピューターは、マッキントッシュのテレビCMに有名な「1984」（暗に大手企業の IBM を意識した情報管理社会打倒のメッセージ）を製作した。正に反体制文化の反映である。

モノのインターネット時代には、3Dプリンターなどの活用により多くのホビイスト（日曜大工）が生まれ始めており、そこから今後も多くのホビイスト（日曜大工）的なスタートアップ企業が台頭すると予測されている。そして IoT 時代が始まるとスタートアップ企業と既存の確立された企業との提携や買収も活発化している。これはパソコン時代初期のマイクロソフトと IBM の OS を巡る歴史的な提携を彷彿とさせる。

■ アウトカム経済とカウンターカルチャー

オープンシステムやフリーと言われているインターネットのコンセプトは、カウンターカルチャーが生み出したものである。またコミュニンを背景とした集合知的な考えも、もとはといえばコミュニンの発想である。

さて現代のカウンターカルチャー運動と言えば毎年ネバタ州のブラックロックで開催される芸術家の創造性祭り「バーニングマン」が有名である。一週間の間、芸術家やソフトウェアエンジニアなどが自主的に集まり、自分たちで思い思いの町を作り、芸術作品を掲げ、コスチュームプレイをして帰っていく。

そこにはグーグルやフェイスブックの創業者、電気自動車テスラの CEO であるイーロン・マスク氏やアマゾンの創業者らが毎年参加している。シリコンバレーからも多くのソ

フトウェアエンジニアや開発技術者が参加する。

社員の時間の 20%を草の根プロジェクトに割り当てているグーグルは、バーニングマンを組織の在り方や社員の自発的なワークスタイルの理想としている。組織から自律したカウンターカルチャーの文化がアウトカム経済を支えている。

<http://bnana.jp/mags/hackers-burningman2015-ticketing/>

■ 個体数の減少する社会で新産業革命は可能か

大量生産・大量消費の時代を経て成熟した市民社会の特徴として全体の個体数の漸減傾向（少子高齢化）と同時に個のパワーの最大限の発揮の可能性（自律、自己表現、自己実現）などが指摘されている。まさか個人は皆、レオナルド・ダビンチに化ける訳ではあるまいが、そう言った潜在可能性が指摘されている。

カウンターカルチャーの提唱する個の自律傾向や創造性の発揮トレンドは一体、どの程度の個人の持つ潜在能力を引っ張り出し、AI化する機械を使って生産性や経済成長を実現できるのだろうか？それとも人口論が提唱するように個の数が増加しなければ経済は成長しないのか？十字軍や新大陸発見にしても過去の産業革命にしても人口爆発が背景にあった。今回のアウトカム経済において先進国では人口爆発が伴わないどころか減少を始めている。これはトマス・ロバート・マルサスの人口論（経済の成長はそれ以上の人口爆発をもたらす）に反する。人口減少下で果たして新しい産業革命（第四次産業革命）が実現できるのか。（それともやはり難民を引き受けるべきなのか）

農業革命以来、短期間で姿かたちをどんどん変化させてきた人類には「無限の潜在可能性が宿っている」と言うレオナルド・ダビンチ的な見方もある。このような見方には早晩、進化生物学、進化心理学、脳科学が答えを出すだろう。アウトカム経済の可能性は「ムーアの法則」と「人の創造性発揮」の相互作用でもたらされるが、人口減少下、これはとても大きな挑戦である。

続く・・・・・・・・